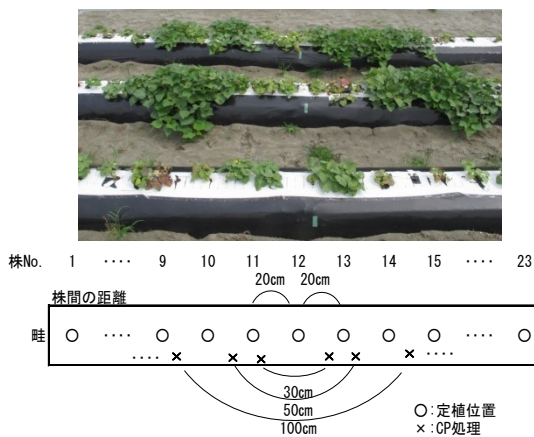


ガスバリアー性フィルムを用いたサツマイモ立枯病に対するクロルピクリン処理間隔の限界と防除効果

はじめに

徳島県のサツマイモ栽培は砂地畑で行われており、最重要病害であるサツマイモ立枯病菌に対してクロルピクリン（以下CP）によるマルチ畦内同時処理が行われています。現在使用されている黒色ポリエチレンフィルム（以下 PE）は土壤消毒剤のガス保持機能が小さいため、CPの揮散を完全には防止できません。

そこで、ガスバリアー性フィルムを利用して、CPの揮散防止と処理量低減化の程度を明らかにするため、防除効果が得られるCP処理間隔の限界を圃場レベルで検討しました。



成果の内容

ガスバリアー性フィルム（以下 TIF）を用いたCP処理間隔の限界を検討した結果、地上部生育は100cm間隔でも効果が認められましたが、ポリエチレンフィルム（以下 PE）ではやや効果が劣りました。茎部はTIFでは地上部生育と同様に100cm間隔でも効果が認められましたが、PEでは発病が認められました。塊根数はTIFでは100cm間隔でも防除効果及び塊根数も高かったですが、PEでは塊根発病、塊根数でも劣りました。

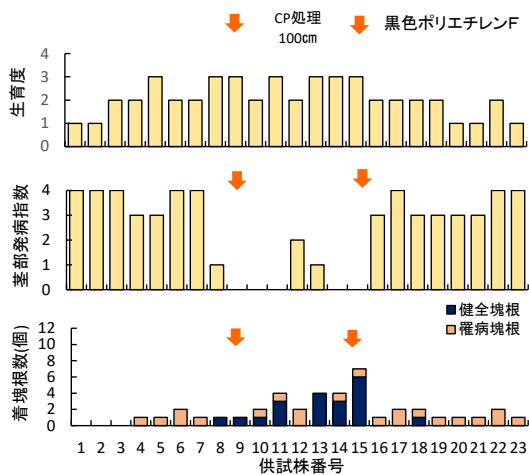
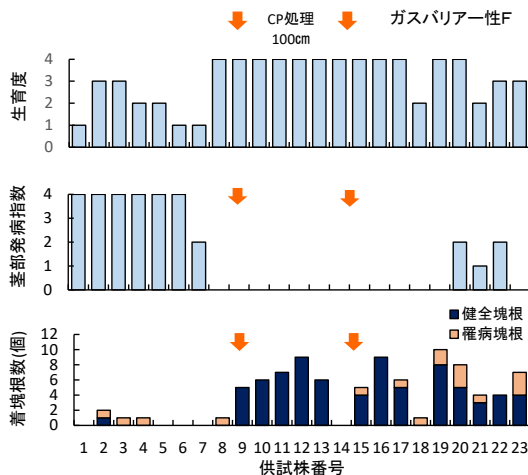


図 ガスバリアー性フィルムを利用したサツマイモ立枯病に対する防除効果（100cm間隔）

今後の展開

ガスバリアー性フィルムを用いることでクロルピクリンの揮散を顕著に抑制できることから、クロルピクリンの施用量を低減することが期待できます。